

あの頃みんな若かった

吉村弓子

『言語学論叢』20号の刊行にあたり、創刊に関わった者の1人として当時の想い出をつづろうと思います。もし記憶違いのことがあったら、どうかお許し下さい。後日ご叱正いただければ幸いです。

私が大学院に入ったのは1980年のことでした。筑波大学一般・応用言語学研究室、略して「一応」言語学などと自嘲気味に呼んでいたものです。私達は言語学の世界をもっと探求したい一心で進学したものの、将来定職にありつけるかどうかもわからない、なんともいえない不安に覆われていました。だから研究室では就職の話はタブーでした。遠くまで飛びたいければ助走が長いのはあたりまえだと、みな頭ではわかっていました。けれど、妹や弟は立派に勤めているのに私はこんなことをしていいのよ、という思いがいつも心の片隅にありました。院生よりも道路工事をしている人達のほうがよほど社会の役に立っている、と言い出す人までいました。今でも道路工事を見ると、あの頃の会話が蘇ってきます。私は道路工夫の人達よりも世の中に貢献しているだろうか、と自問します。

とはいえ、いつも曇った顔をしていたわけではありません。新入生歓迎会、修士論文完成祝賀会、忘年会、留学歓送会、帰国歓迎会、誕生会と理由をつけては集まり、言葉を肴に楽しんだ話のないようです。

「糸ゴンニャク」～「シラタキ」は同じ物を指す地域方言なのか、それとも別物なのか。「子どもにお話をしてあげる」という表現は丁寧に言っているつもりなのかもしれないが、恥知らずなのではないか。アメリカ人は「Jacobson」を「ジェイコブスン」と発音するが、「ヤコブソン」と原語の発音をすべきだ、アメリカ人は失礼だ。いや、世界中から移民が集まったアメリカであらゆる原語の発音に精通することなんて無理なのだから、我々の仲間として認めますよという意味表示としてのアメリカ式発音なのではないか。日本人の名前は英語になると「Yasuhiro

Nakasone (中曽根康弘) ” というように名字と名前が逆さになるが、中国人は “Mao Zedong (毛沢東) ”、韓国人も “Kim Il Sung (金日成) ” と変わらないのはどういうことなのか。日本人同士は初対面の人を名字で呼ぶのに、僕が外国人だから「トム (仮名)」なんて言う。日本で名前と呼ばれるのは子どもかタレントか水商売の人だから、外国人をばかにしているのではないか。そういう言い方は子どもやタレントや水商売の人達に失礼だし、あなたを「トム」と呼ぶのはあなたの国の習慣に合わせているだけだ。日本は自分流に通すのではなく相手に合わせる文化だ.....

話をつきることなく、空が白むまで熱い議論が続きました。20年経ってみても新鮮な奥の深い話をしていたことに驚きます。

さて、研究室のジャーナルを創ろうという話がどのように起こってきたのか、正確な記憶はありません。創刊号の日付が82年4月とあるところを見ると、おそらく81年あたりに先輩の橋本さんから協力してほしいと言われたような気がします。細かな取り決めは断片的に覚えています。投稿資格は研究室の在學生と卒業生のみで、先生方は含めないことにしました。原稿が集まらないときに安易に先生方を頼りにするような情けない事態を招かないようにと、先々のことまで配慮してのことでした。印刷・製本費用はすべて自前でしたから、会費と原稿掲載料でまかなうしかありませんでした。同じ研究室の仲間とはいっても、論文の執筆をお願いしながら掲載料を徴収するのは辛い役目でした。表紙の色は若い力を表したいということで、新緑の色を選びました。名称は、ここは日本なのだから和語にするべきだという理由で「ことのは」という候補もありましたが、議論の末「言語学論叢」に決まりました。英語名もほしいという話になり、ジャーナル名は “Tsukuba Working Papers in Linguistics”、研究室名は “Linguistic Circle The University of Tsukuba” としました。詳細なきさつは忘れてしまいましたが、研究室の何人かが傾倒していたプラーグ学派の英語名称に似せて名付けたように記憶しています。1998年にプラハのカレル大学で国際会議があり、あの頃の仲間4人ほどに再会したおりには、ああ、ここが「言語学論叢」ゆかりの地なのだ感慨もひとしおでした。

できあがった『言語学論叢』は、言語学会、国語学会、計量国語学会、大

修館『月刊言語』編集室などに送りつけ、筑波大学一般・応用言語学研究室の実力を知らしめようと思いました。若気の至りという感もありますが、学会誌・雑誌の受領論文等一覧コーナーに「言語学論叢」の名前を見つけてはほくそ笑み、学会展望号などに言語学論叢掲載論文の何編かが紹介されているのを目にしては驚喜したものです。

このように、わずか 14 名の大学院生の情熱、誇り、夢、気負い、不安等がないまぜになって誕生した『言語学論叢』ですが、後から見れば私達の考えに足りないところもあったことでしょう。時代の流れにそぐわなくなったこともあるでしょう。ここに私が昔話を披露したのは、若い会員の方々にもそういう時代のことを知っていただきたいという気持ちによるものです。編集委員の方は創刊時のことにとらわれず、改訂を重ねていってくださるようお願いいたします。『言語学論叢』のよりいっそうの発展をお祈りします。